

2017年12月12日

博士学位論文審査要旨

申請者 杉山 実加（白梅学園大学 助教）

論文題目 昭和初期における表現指導を重視した綴方教育の展開に関する研究
—実践内容・方法を中心に—

申請学位 博士（教育学）

審査員

主査 湯川 次義 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）（青山学院大学）
副査 水原 克敏 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 教育学博士（東北大学）
幸田 国広 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）（早稲田大学）
高田 文子 白梅学園大学教授

1. 本論文の課題と分析の枠組み

本論文は、戦前の作文教育としての綴方教育の中で、昭和初期の表現指導を重視した教育の展開に着目し、その実践内容・方法を明らかにするとともに、各府県の師範学校附属小学校の実践や生活指導を重視した実践と比較することにより、表現指導を重視した実践の展開と特徴を究明しようとするものである。

本論文が主な考察対象とする1930年代は、経済恐慌の影響を受けて農村部・都市部を問わず経済的貧困に陥っており、そうした状況の中で、綴方教育では児童に自分の生活を直視させ、生活の改善や向上を目指す態度を育成しようとする、いわゆる「生活綴方」が展開されていた。これまでの綴方教育史研究では、その実践のもつ教育的意義が着目され、多くの研究成果が蓄積されて、この時期の綴方教育史を裏多きものにしてきた。しかし近年の研究では、1930年代以降の綴方教育についての考察が生活綴方成立史に重点を置き過ぎていたこと、またその実践内容の詳細な分析が十分ではないこと、の2点が指摘されている。さらに、同じ時期には表現指導を重視した綴方教育も幅広く、かつ多彩に展開されていたものの、その実践の展開や実態の解明はほとんど進められていないのが現状である。

筆者は以上の研究状況を踏まえ、表現指導を重視した綴り方教育に重点を置きながらも、生活綴方教育を含めて両者を相対的にとらえ、1920年代半ば以降の綴方教育の理論及び指導の実態を実証的に総合的に究明しようとしている。

なお、筆者のいう「表現指導を重視した綴方教育」とは、文章表現を通しての生活指導ではなく、あくまでも国語科の一分科として文章表現能力の指導を主目的として、現象や出来事の本質を捉え感じたことを、文芸性の高い文章で表現する力を育てようとする実践を指している。

考察の時期としては、綴方において表現と生活が指導対象として認識され始めた1923年頃から、国民学校令が公布される1941年頃までを設定している。

以上のように、本論文は表現と生活の両方が指導対象とされるようになった1923年以降の綴方教育に着目して、特に表現指導を重視した実践を行っていた教員たちが、どのような指導内容・方法を唱え、どのような実践を展開していたのかを明らかにしようとしている。さらには、生活指導重視と表現重視という綴方教育の二つの系譜を結び付けるという新たな視点から、この時期の綴方教育の全体像を究明するという意欲的な研究を試みている。特に、表現指導を重視した教員たちの指導の実際を、静岡県を中心とした地域文集の分析を通して明らかにしようとした点は注目に値する。

このような研究課題を究明するため、筆者は豊富な資料を用いており、その主なものとして、各府県の師範学校附属小学校が出版した指導書及び教授細目、東京高等師範学校附属小学校教員の著書、同校出版の教育雑誌、綴方教育を実践した各教員の著書、雑誌投稿記事、地域文集、学級文集などをあげることができる。

以上のような研究を進めるにあって、筆者は主な研究課題として以下の3点を設定している。

(1) 表現指導を重視した実践内容と方法の究明

1930年頃から生活指導を重視した実践が勃興し注目を集めた時期に、各地では表現指導を重視した実践を続けた教員が存在した。従来の研究では、生活指導を重視した実践を取り上げて昭和初期の綴方教育の発展が検討され、表現指導を重視した教員たちの実践については十分な検討がなされてこなかった。これに対して、一部の先行研究で分析視点の偏りが指摘され、新たな視点から実践を捉えなおしていることを踏まえると、これまで注目されてこなかった実践についても検討が必要と考える。そこで、本論文では、菊池知勇、富原義徳、古見一夫を取り上げ、彼らが行った実践内容と方法を究明する。

(2) 地域文集発刊を通じた地域での教科研究活動の実態究明

昭和初期には、各地で郡教育会が主宰する地域文集が発刊されており、この発刊活動は地域での教科研究を推進する上で重要なものであった。しかし、史料が現存していない場合が多くその実態解明は十分には行われていない。このため、本論文では実践例の一つとして静岡県駿東郡『児童文苑』を分析し、表現指導を重視した実践が文集を通してどのように地域内の教員に受容されたのかを明らかにする。さらに発刊方法や編集活動についても検討し、文集発刊を通じた教科研究活動の実態を究明する。

(3) 昭和初期の綴方教育の全体像の再検討

本論文では、①各府県の師範学校附属小学校の実践、②生活指導を重視した実践、③表現指導を重視した実践の3つを取り上げて、実際の指導内容と方法を比較する。先行研究では各実践に根づく教員の子ども観や教育観といった思想から実践の目的や指導の意味が明らかにされてきた。本論文では、そうした知見を踏まえながらも、各実践で行われた実際の指導内容と方法を比較し、異なる思想や理念の下で展開された実践の差異や関連性を明らかにする。これによって、表現指導を重視した実践の特徴を究明するとともに、生活指導を重視した実践での表現指導の実態についても明らかにする。

そして筆者は、本論文の特色として以下の3点を挙げている。

第一に、表現指導を重視した実践について、地域文集、教員の著書、雑誌掲載の記事等、従来の研究では分析されなかった資料を用いて究明することにある。本論文で取り上げている3人は、これまでも生活綴方教育史の中で位置づけられてきたが、分析は実践の一部分に留まっ

ている。本論文では、彼らの実践内容と方法を検討することで、これまでの生活指導を重視した実践に着目した先行研究では未解明であった昭和初期の綴方教育の実態を明らかにする。

第二に、各実践での記述前から記述後までの表現指導と生活指導の内容と方法を具体的に明らかにする。先行研究では教員の人生観や子ども観、教育観といった実践を形成する背景にまで迫り、実践の意義や特徴が明らかにされてきた。しかし、そうした研究では、指導内容についての具体的な検討がなされていないもの、もしくは指導の一部面だけが明らかにされている場合が多い。そこで、本論文では表現指導と生活指導の両方を取り上げるとともに、指導の目的や意義に留まらず具体的な指導内容や方法を明らかにする。これにより、綴方観や文章観だけでなく、実際の指導においてどのような差異があったのかをも明らかにすることができ、各実践の独自性や成果をより明確にすることができる。さらに、表現指導を重視した実践の展開が、新しい実践の勃興や1930年以降にみられる生活指導重視から表現指導重視への転換にどのように関係していたのかについても検討を試みる。

第三に、地域文集の発刊活動を取り上げて地域ぐるみの綴方教育の実態について明らかにする。本論文では表現指導を重視した実践の検討において菊池知勇をはじめ3人の実践を主に取り上げるが、彼らが関係した文集発刊活動についても実態を考察することで、一般教員たちにどのように受容されたかという視点も含めて、実践の展開を明らかにする。

以上の研究課題を明らかにするための分析の枠組みとして、次の5項目を設定している。

(1) 各府県の師範学校附属小学校での綴方教育について、その目的・表現指導・生活指導の時代的変遷及び各時期の特質を明らかにする。

本論文では、各府県の師附小の実践を①1923年以前、②1923年から1929年、③1930年以降の3期に分けて、各校が出版した教科指導関連書籍の記載内容を分析し、全国的な動向について考察する。なお、各府県の師附小が東京高等師範学校附属小学校の国語研究部が提唱した理論や実践を参考にしている場合が多いことから、同校に関しては研究部に所属した各教員が独自に発表した理論についても注目する。

(2) 生活指導を重視した実践における生活指導・表現指導の内容と方法について分析する。

本論文では、東北地方での実践者として国分一太郎、西日本での実践者として佐々井秀緒、全国的に活躍した実践者として小砂丘忠義の3人を取り上げる。特に各実践の表現指導については、資料を再検討し具体的な指導事項や指導方法を明らかにする。

(3) 表現指導を重視した実践における表現指導と生活指導について、その目的・内容・方法について分析し、その理論と実践の特色と時期的推移を明らかにする。

本論文ではこの実践者として菊池知勇、富原義徳、古見一夫の3人を取り上げる。先行研究では用いられていない史料を用いて、菊池、富原、古見が展開した実践内容と方法を分析するとともに、生活指導を重視した実践の勃興が彼らの実践に影響を及ぼしたのかについても着目する。さらに、3人の実践にみられる共通点と相違点を考察することで、表現指導を重視した実践の特色とそれぞれの実践の独自性についても考察を試みる。

(4) 地域文集『児童文苑』で行われた指導内容と発刊活動の実態を明らかにする。

同文集は1926年の創刊から1941年の休刊まで15年間発刊が続けられた文集であり、活動には静岡県駿東郡内26校の小学校が関わった。本論文では、創刊までの経緯を整理することで文集発刊の目的を明確にするとともに、編集委員長の交代を区分として①創刊から1929年、②

1929年から1938年、③1938年以降の3期に分けて、各時期の実践内容を分析することで、文集を通して行われた実践内容と発刊活動の展開をより詳細に明らかにする。

(5) 表現指導を重視した実践と各府県師附小の実践、生活指導を重視した実践を比較検討する。

上記(1)～(3)の分析を踏まえ、表現指導を重視した実践の特徴を究明するために、指導段階を①記述前の指導、②記述の指導、③記述後の指導の3つに分けて、各段階での実践内容と方法について対比的に検討する。

2. 本論文の構成

本論文の目次構成は以下のとおりである。

序章
第1章 明治期及び大正期の作文・綴方教育の動向
第1節 課題作文から自由作文への移行
第2節 初等教育における生活指導
第3節 東京高等師範学校附属小学校の見解
第2章 各府県の師範学校附属小学校の綴方教育
第1節 1923年以降の東京高師附小教員たちの主張
第2節 1920年代までの各府県師附小の見解
第3節 1930年以降の各府県師附小の見解
第3章 1930年代における生活指導を重視した綴方教育
第1節 生活指導を重視した実践の背景
第2節 『綴方生活』の発刊と小砂丘忠義の綴方教育
第3節 佐々井秀緒の科学的綴方
第4節 国分一太郎の生活を勉強する綴方
第4章 1920年代後半からの表現指導を重視した綴方教育
第1節 菊池知勇による『綴方教育』の創刊
第2節 富原義徳の土の綴り方
第3節 古見一夫の形象原理に立つ綴方教育と日本精神に立つ綴方教育
第5章 表現指導を重視した綴方教育の実際 駿東郡『児童文苑』の場合
第1節 文集発刊の経緯
第2節 全児童購読文集への変更と発刊活動の発展
第3節 『児童文苑』誌上での指導
終章

3. 考察結果と総括

第1章では、昭和初期の綴方教育の前史として、明治期から大正期にかけての綴方教育と生活指導の展開を考察している。その概要は以下ようになる。

1891年の「小学校教則大綱」、続く1900年の「小学校令施行規則」において、児童の日常生活を題材に含めること、文章は「平易」であることが示されたが、実際には1915年頃から先駆的な実践が発表され、1920年代には一般の小学校での実践にまで普及することになった。この

動きに関連して、1923年に東京高等師範学校附属小学校（以下、東京高師附小と略記する）が「綴り方指導の根本方針」として方針を簡潔に示した役割は大きく、自由作文を実践に取り入れ始めていた教員たちからは、目指すべき綴方の在り方を示したものとして受容された。

続いて、第2章では各府県の師附小の実践、第3章では生活指導を重視した実践、そして第4章では表現指導を重視した実践について検討している。筆者は、これらの章については、(1) 記述前の指導、(2) 記述の指導、(3) 記述後の指導の3つに分けて考察結果と各実践の意義をまとめている。

まず、(1) 記述前の指導については、生活指導と構想の指導に分けて考察している。

東京高師附小が示した綴方での生活指導は文章表現のための生活観照態度の指導であり、生活内容を直接指導するものではなかった。各府県の師附小の多くは同校の方針を取り入れたため、「物事を深く観、細かく味ひ、豊かに想像する態度の養成」が各校で目指された。

こうした生活指導が『綴方教育』の主宰であった菊池知勇や静岡県教員富原義徳、古見一夫の実践でも行われていた。古見は、物事や他者の外面的な部分だけを観るのではなく、他者が考えていることや心情までを推し量れるほどにその対象を観照する態度を指導した。富原は綴方での「観る」は「科学的見地」からの「観察」とは異なると述べ、仏教的思想から綴方での観照は「自らの魂の光」を信じ「生命の発動する姿を直観する」ことであると自己内省を重要視したが、両者はこれらの指導について具体的な指導事項を設定することはなかった。

こうした中で、菊池は他教科での学びや生活上で学んだ事柄を綴方での題材として認めるべきと主張し、生活を工夫して進めていく態度を指導していた。表現指導を重視する立場でありながらも、課題解決の態度を指導していた点は特筆すべきである。1930年代に入り、ようやく各府県の師附小の実践でも科学的な生活事象を題材とし、調査観察を推奨する傾向が現れたことから、菊池は表現指導を重視した実践において先駆的な指導内容を提唱したと言えよう。

一方、生活指導を重視した実践では、理科と同じように生活を観察する態度を求めるとともに、観察すべき生活事象と方法を具体的に示し、観察記録やインタビューが課されていた。また、集団の一員であることを意識した観察と考察態度も指導していた。

以上のように、文章表現を目的とするか手段とするかの違いから指導内容には大きな違いがあり、生活指導を重視した実践で観察内容や方法を具体的に示していたのに対して、表現指導を重視した実践での指導が「深く見る」「凝視」といった抽象的な解説に留まるものであった。

次に記述前の構想の指導についてまとめると、東京高師附小の教員たちは「書き出す前によく考へて、大体の順序を頭に思ひ定める」程度で十分であると主張し、技法を児童に強制しない方針であった。これは各府県の師附小も同様の見解を示したため、指導事項には構想の指導が含まれていても、その指導の具体的内容と方法については積極的に検討されていなかった。

こうした中で、表現指導を重視した実践、生活指導を重視した実践では、具体的な指導内容や方法の提案が行われていた。師附小の見解に近かった富原義徳は、教員と児童の一对一の対話を通して生活体験を振り返ることで構想を練る方法を提案したが、時間がかかる指導であったために実践としては限界があった。菊池は見聞きした順序通りに綴ることが「一番書き易い」としながらも、その方法に限定することなく、複数の構想法を指導した。さらに、文章の中心を決めるといった単純な構想は尋常科1年から指導すべきと主張した。

古見は菊池とは反対に特定の構想の方法のみを指導した。古見は構想の手順を3段階で簡潔

に示し、構想の効果を高めるために「綴方凝想帖」という手帳を考案し児童に持たせた。6年間の指導として体系化するまでには至っていなかったが、題材の種類に関係なく自由作文指導の際に活用できる構想の手順を簡潔に示した点で、古見の実践の意義は大きかった。

生活指導を重視した実践では、国分が構想を図式化するという他の実践では見られない指導を行っていた。なお、生活指導を重視した実践では調査・観察事項の検討も構想の一部に含まれていた。そこでは、佐々井の「科学的綴方」での指導にみられるように、複数の調査結果をもとに生活上の課題や問題点を明らかにするという複雑な考察を児童に要求していた。

以上の考察の結果については、次のようにまとめられている。すなわち、記述前の構想の指導では、各教員が独自の指導内容と方法を提案する傾向があった。生活指導を重視した実践では、従来は指導内容に含められない調査事項の検討が活動を加えていたために、その際の指導方法を考案する必要があった。また、表現指導を重視した実践においても各教員が独自の指導内容と方法を提案したことは、東京高師附小をはじめ各府県の師附小が順序正しく綴ることができるという見解を示し、指導方法を具体化しなかったことを考えると、菊池や古見などはこの部分で重要な役割を担っていたと捉えることができる。

続いて、(2) 記述の指導についての考察結果を以下のようにまとめている。

1920年代に各府県の師附小は児童の自由な表現を重視し、綴った内容に基づいて形式を指導することを目指した。ところが、その後、東京高師附小の教員たちが細かな描写を用いた文章表現の指導内容と方法を主張したことや、生活指導の範囲を超えた実践が勃興したことを受けて、1930年代に入ると表現技術の確実な獲得を目指す傾向が強まった。現状の綴方教育では表現指導が疎かになっている、もしくは生活指導のための手段と考えられている傾向があると指摘し、20年代には行われていなかった表現指導が再び登場し計画的な表現指導が行うようになった。つまり、これ以前の1923年頃から1930年代前半において各府県の師附小は、どのように表現指導を行うかという具体例を、公立小学校の教員らに示す存在にはなっていなかった。

続いて、表現指導を重視した実践では、1920年代後半に、菊池が議論文や説明文なども含めた様々な表現形式や技法を指導する一方で、富原と古見は描写を用いた生活作文のみを扱った。指導内容には違いがみられたが、描写による文章表現を基本としていたことは共通であった。

さらに、本論文ではこの描写の指導が指導目的は異なるものの、生活指導を重視した実践でも行われていたことを明らかにした。また、客観的に生活を考察することを求めていたため、説明文や調査報告文といった文章形式の指導も含まれていた。生活指導のための表現指導の内容が多岐にわたり高度な表現技術を含むものであったことは特筆すべき事柄、と指摘している。

最後に(3) 記述後の指導の考察結果について、筆者は次のようにまとめている。各府県の師附小は1920年代から一貫して児童の生活内容の直接的な指導は行わないと主張し、生活観照態度を指導内容とした。これは表現指導を重視した実践にも共通するものであった。また、生活内容や考え方が綴られた場合の対応については、菊池、富原、古見の3人は綴方の時間内ではなく、教科外の生活指導として授業時間外に個別に指導すべきとの見解を示していた。

生活指導を重視した実践では、文章を通して生活について思考させることが指導の目的であった。作品鑑賞では綴られた生活内容や主張に注目し、よりよい生活を目指して具体的な「実行生活」について思考させた。こうした実践が各地で行われる中で、上述したように師附小が生活を直接的には指導しないと表明していたことは、生活指導を重視した実践への批判であっ

たとえられる、と指摘している。

このように指導目的の違いは、実生活の指導を記述後の指導に含めるかという指導内容の違いとなって現れていた。生活指導を重視した実践が勃興してからも、菊池や富原らが前述のように生活内容の指導を綴方では行わないと主張していたことは、そうした指導は綴方での指導範疇を超えていると考えていたことを裏づけている。ただし、鳥取県の教員佐々井の実践では、どちらか片方の実践に偏らずに両者を統合させようとする考えが窺えた。統合を目指したことで小砂丘や国分の実践ほど生活について思考させることはできていなかったが、実用的文章と趣味的文章の両方を指導していた点は評価されるべきであろう。

比較の結果明らかになった各実践での指導内容・方法の共通点と相違点は、第一に細かな描写は全ての実践において基本的な表現技法として指導されていたこと、第二に扱う文章形式の幅には教員間で差がみられ、①表現指導を重視した実践では、議論文などの形式指導は行わないとする実践と様々な形式の指導をするとした実践に分かれ、②生活指導を重視した実践ではその指導目的のために多くの形式を指導していた。そして、第三に生活指導の内容は、生活観照を通して生活の中での感動などの主観を明確に掴むことを指導した表現指導を重視した実践と、観察や調査を通して客観的に集団や社会について考えさせ実生活の行動へと反映させようとした生活指導を重視した実践で大きく異なっていた。

以上のように各実践での指導内容・方法を考察した上で、第5章では静岡県駿東郡の地域文集『児童文苑』の発刊活動に注目し、彼らの実践の地域での展開状況を究明した。地域内の教科研究会の活動の一環として創刊された文集は、編集委員長の綴方観を基本方針としながらも、各編集委員がある程度自由に作品批評等を行える体制であった。この体制が整っていたことで、教員たちは富原や古見の主張を受容し自らの実践に取り込んでいながら、実践の理論を深化させて指導力を向上させたのであった。『児童文苑』は、地域内の教員にとっては重要な教材であり、指導書ともなっていたと言える。さらに、富原が発表した「土の綴り方」の理論と実践が他の教員によって深められていたことを明らかにした。富原の主張が後の生活指導を重視した実践の勃興に影響したという先行研究の成果を踏まえると、『児童文苑』の編集活動で教員交流が活発化し、実践の成果を共有していたことは歴史的意義のある実践であったと言える。

以上の考察を踏まえ、筆者は表現指導を重視した実践について3点の特徴を挙げている。

第一に、この実践は、1920年代後半から一貫して表現指導を重視し、各府県の師附小の主張を具体化し、内容と方法の検討を進めた。1920年代後半から1933年頃までの間、菊池は多くの文例を挙げて様々な文章形式の指導について解説し、古見は各表現指導の指導内容を限定し簡潔な指導方法の検討を進めた。また、富原は子どもらしさや地方的な生活を重視して生活観照態度を指導する実践を提案した。自由作文が綴方での文章表現として一般化し、指導は表現内容に即して行うことが理想とされていた中で、菊池をはじめとする教員たちが具体的な指導内容・方法を提案したことは、綴方の歴史で重要な意義をもったとしている。

第二の特徴は、その表現指導が大きく二つの傾向に分かれていたことである。すなわち、あらゆる生活場面や思考を表現の題材として認め、様々な形式から適した方法を選び正確な表現をさせようとした菊池の実践と、指導内容を特定の文章形式に限定し、その方法の確実な修得を目指した古見や富原の実践とに分かれる。菊池の実践は各地の教員が必要な指導をそこから適宜取り出して自らの実践に取り入れることができるものであり、古見の実践は指導内容・方

法が簡潔であり教員たちが模倣しやすいものであった。菊池の実践の場合は、児童が多様な文章を自由に綴ることが可能であったが、自由作文を推奨する中で、各形式の指導をどのように体系的に指導するかが課題であった。そして、古見と富原の実践では、特定の技法での表現技術の習熟は見込めるが、その他の文章形式を用いた場合の文章表現能力は向上できないという課題があった。この時期の表現指導を重視した実践が、生活指導を重視した実践と同じく多様に展開されていたこと明らかにできたことは、本論文の一つの意義と考える。

表現指導を重視した実践の特徴の3点目は、生活指導を観照態度の指導に限定し、主観を重視したことである。自己の感動という目に見えない事象を観照の対象としたために、その観照の視点や方法については抽象的にしか指導できていなかった。1921年の時点で東京高師附小の田中豊太郎が「対象について深く深く」考える態度の指導が観照態度の指導であると主張したが、この理論が具体化されないまま1930年以降も展開された。これは表現指導を重視した実践が克服できなかった課題であったとしている。

最後に、昭和初期の綴方教育の全体像を以下のようにまとめている。

従来の研究では、生活指導を重視した実践を行っていた教員の一部が1930年代後半に表現指導を重視する立場に転換したことについて、様々な分析が行われてきた。しかし、本論文で明らかにした事実を踏まえると、生活指導を重視した実践だけを対象として昭和初期の綴方教育の展開の考察を試みることは無理があるとしている。

大内善一は、1939年に平野婦美子が発表した実践が、生活指導を重視しながらも文章表現技術の定着を目指す表現指導も含むものであり、戦前の綴方教育の到達点であったと指摘している。その平野が富原の実践に影響を受けたと回顧していることから、表現指導を重視した実践の影響を綴方教育史の分析に含める必要性は明らかである。さらに、1935年頃からは各府県の師附小や表現指導を重視した実践においても、指導対象外としてきた文章形式や生活観察の指導を指導に含める動きがみられた。昭和初期の綴方教育の到達点の検討は今後も進められていくべき課題ではあるが、大内の評価を前提として考えたとしても、その到達点に達したのは生活指導を重視した実践だけではなく、表現指導を重視した実践も含めて展開していた同時期の綴方教育の成果であると言えよう。すなわち、生活指導を重視した実践、表現指導を重視した実践の両者において、それぞれの指導内容・方法の問題点や不足点を補い、新たな実践を生み出そうとする展開が1935年頃から進んでいたと捉えられよう。結果的にそれは指導内容・方法の統合へと繋がった。しかし、指導内容・方法のみが統合へと進み、綴方教育の目的については両者の見解は異なるままであったことから、どちらも理論と実践が確立しないまま、国民学校での綴方の実践へと進んでいった。そのため、戦後の作文・生活綴り方教育論争において、再び「書くことによる教育」の在り方が注目され、議論が繰り広げられることになるのである。

4. 総評

本論文は、1920年代半ば頃から1940年代初頭にかけての小学校での綴方教育について、特に表現指導を重視した教育に着目し、①その実践内容・方法を明らかにすることを中心にして、②指導的立場にあった各府県の師範学校附属小学校の理論と実践の考察、③生活指導を重視した実践との対比により、この時期の作文教育を総体として解明しようとした意欲的な研究である。本論文は、明確なテーマ、研究視点、分析課題を設定するとともに、それを解明するため

に堅実な学問的手法を駆使し、豊富な資料の分析と考察を行い、論証力をもって研究課題の解明に至った優れた論文である。そして、従来の研究水準を超える新たな成果を導き出し、戦時期や戦後の作文教育の研究に連続する可能性を秘めた成果を提示している。さらには、今日の作文教育の在り方を検討する際の歴史的素材を提供した研究としても高く評価できる。

以下、本論文の主要な評価・意義について記す。

本論文の意義として、第一に斬新な研究課題・視点を設定して1930年代を中心とした綴方教育の総合的な研究を行い、綴方教育の歴史に新たな知見を提示した点が指摘できる。すなわち、従来の1930年代の綴方教育研究は、生活綴方一辺倒の観があったのに対して、表現指導を重視した地道な教育実践が展開していた点に着目し、それを理論面と実践面から究明するという挑戦的な視点を設定し、綴方教育史研究を一段と進展させる研究成果を示したと評価できる。さらにいえば、筆者は生活指導と表現指導を重視した二つの綴方指導の系譜を結び付けて総合的に考察し、1930年代の綴方教育を捉えなおそうとしたのであり、今後の綴方教育史研究の方向性を明示しただけでなく、後述するような高いレベルの研究成果を導き出している。

第二の意義は、歴史的研究としての学術的方法が貫かれている点であり、資料の徹底的な収集・整理・分析を行い、歴史研究の手法を十分に踏まえた、学術的に質の高い論文としてまとめ上げている。すなわち、本研究に必要な東京高等師範学校や各府県の師範学校附属小学校出版の指導書、教授細目、教育雑誌、さらには綴方教育を実践した各教員の著書、地域文集、学級文集などの丹念な資料調査を行うとともに、それらを精緻に分析し、考察を加え、歴史的に意義付けるという姿勢を論文全体で貫いている。

第三の意義として、昭和初期の綴方教育について、従来の研究には見られない高いレベルの研究成果をもたらした点を指摘できる。この点について研究課題に即して記す。

(1) 表現指導を重視した実践について：菊池知勇・富原義徳・古見一夫の三人の実践について、理論だけでなく実践内容とその指導方法を分析し、各教員が師範学校附属小学校の実践の模倣ではない、独自の実践内容を提案していたことを明らかにした。さらに、表現指導を重視した実践主導者の特徴の相違を明確化している。具体的には、三人共に細かい描写による表現を指導の基本としたとしつつ、各人の特徴として、おおよそ次のように指摘している。すなわち、菊池は幅広い題材と表現形式を内容に含めた実践を行い、「一番感動した部分」を見聞きした順序に従って綴方を構想し、「様子や情景を通して感動を表現」する指導を実践した。富原は「童心・地方的特質の表現」などを目的とし、「生命の発動する姿を直観する」自己内省や個々の児童と教師との対話を重視した実践を行った。古見は綴方を「人間性向上のための『芸術的陶冶』を担う教科」として位置づけ、自己内省の必要性や「日本精神に立つ綴方教育」を提唱し、誰もが効果的に使える構想手順やノートとしての「綴方凝想帖」を提唱するなどした。このように三人の実践の特徴を浮かび上がらせるとともに、全体的な考察結果として、表現重視の綴方は①師範学校附属小学校よりも具体的な指導内容・方法を提案したこと、②観照態度の指導とされた生活指導の内容は具体性に欠けるものであったと指摘している。

(2) 地域文集の発刊活動について：本研究では、従来の研究では扱われることが少なかった地方での綴方教育の実践に着目し、静岡県を中心に「地域文集」の分析を行い、この時期の作文教育の実態の一端を明確にしている。すなわち、静岡県駿東郡で発刊されていた『児童文苑』について、その編集体制や誌面構成の変遷、指導内容について深い考察を行っている。また、

他の地域で発刊された地域文集についても、同様な検討を行っている。『児童文苑』の分析結果として、①富原義徳や古見一夫といった中心人物の実践理論と方法が、文集を通して地域内の教員たちに伝えられ、受容されていく環境が整っていたこと、②地域文集は綴方教育の教材および指導書として重要な役割を担っていたこと、③生活指導を重視しない編集方針が批判されたものの、表現指導を重視した編集方針を継続したこと、を明らした点は高く評価できる。

(3) 昭和初期の綴方教育の特徴の解明：昭和初期の綴方教育において、従来十分な実態解明が行われていなかった実践を取り上げて、その実践内容と方法を明らかにし、それにより綴方教育が勃興した時期に、表現指導を重視した綴方教育も多彩に展開されていたことを実証した。本論文の考察結果を踏まえると、生活指導を重視した実践だけでは昭和初期の綴方教育の展開の全体は捉えられないとの視点は妥当であることが証明されたといえる。すなわち、筆者は、生活指導を重視した実践、表現指導を重視した実践の両者において、指導内容・方法の問題点や不足点を補い、新たな実践を生み出そうとする展開が1935年頃から進んでいたことを明らかにしている。そして、結果的にそれは指導内容・方法の統合へと繋がったと結論づけている。しかし、指導内容・方法のみが統合へと進み、綴方教育の目的については両者の見解は異なるままであったことから、どちらも理論と実践が確立しないまま、国民学校での綴方の実践へと進んでいったと指摘している。この指摘は、本研究の成果として高く評価できる。

さらに筆者は、戦後の作文・生活綴り方教育論争において、再び「書くことによる教育」の在り方が注目され、議論が繰り広げられることになると指摘しており、本研究は戦前の綴方教育の発展過程と到達点を再検討する必要性を示しただけでなく、戦後初期の作文教育の系譜の研究への展望を開いたとも評価することができる。

以上のように、全体として本論文は、昭和初期の小学校の綴方教育について、表現指導を重視した教育を中心として、生活綴方教育との対比を含みながら、全体的把握と歴史的特徴を明らかにした研究であり、新しい知見を数多く示しており、学術的価値の高い論文といえる。

最後に、本論文の問題点と残された課題について記す。第一に、生活綴方を主張していた小砂丘忠義がなぜ表現指導を重視した教育に転換したかに関連して、小砂丘が実際にどのような表現指導を提案したかを明確にすべきと考える。第二に、この時期の綴方教育の主導者の唱える理論を「生活指導」「表現指導」と括っているため、論理の展開や構造が必ずしも明確ではない点も指摘したい。第三に、1930年前後に行われた表現指導を重視した綴方教育の位置を、明治初年以降の全体的な綴方教育の系譜あるいは国語教育史の展開の中で明確にすることが必要と考える。綴方教育である限り「表現」を重視するのは当然でもあり、その中でこの時期に展開された表現指導重視の教育的特徴や意義を明確化することが重要ではないだろうか。

しかし、本研究は新たな視点に基づいて新たな資料に基づく分析・考察を重視したものであり、上記の問題点は本研究の発展として位置づいている。今後の研究の進展に期待したい。

以上のような今後の課題を若干含みながらも、本論文により学位申請者が研究立案・遂行能力、論理的説明能力、高度な専門的学識を有していることが明確になることから、審査員一同、総合的に判断して本論文が「博士（教育学）」を授与するに十分値するものであるとの結論に達したので、ここに報告する。